

地球市民村総まとめシンポジウム全三回 Vol.3 抄録

「愛・地球博におけるNPO/NGOの役割」

計画過程や市民参加への多様な関わりと意義を確認

地球市民村では、9月18日に総まとめシンポジウムVol.3「愛・地球博におけるNPO/NGOの役割」を実施しました。愛・地球博の長かった計画過程や市民参加に様々な立場で深く関わった関係者が一堂に集い、多様な市民やNPO/NGOの関わりや役割があったことが確認され、とても白熱した意義深い場になりました。

下記の通り、概要と抄録をお知らせいたします。

■開催概要

- テーマ : 愛・地球博におけるNPO/NGOの役割
日時 : 9月18日(日) 13:30~17:30
会場 : 地球市民村 交流ホール
ゲスト : 博覧会協会 協会事業管理室 室長 後藤久典
NPO birth 代表 折原磨寸男
日本野鳥の会 自然保護室長 古南幸弘
海上の森の会 運営委員(元のみ山自然観察会代表) 曾我部行子
東京大学大学院情報学環教授 吉見俊哉
日本環境教育フォーラム専務理事 川嶋直
地球市民村 事務局長兼NPOチームマネージャー 中野民夫
(以上敬称略)
- 来場者数 : 約80名

■議事抄録

★第一部 : 13:30~15:25

主催者挨拶 / 博覧会協会 協会事業管理室 室長 後藤久典

今日のシンポジウムは名目上「博覧会協会主催」となっているが、実質的にはNPO birthの折原氏が発起人となり各NPO/NGOの協力を得て成り立っている。つまりNPO/NGO主催と言えるこの場で、自由に意見して欲しい。愛知万博の意味、そして万博が終わって何を残せるかについて、実りある議論をできる場にしたい。

万博開催までの歩み / 地球市民村 事務局兼NPOチームマネージャー 中野民夫

愛知万博開催までの道のりに如何にNPO/NGOが関わってきたか、1988年の「愛知県知事、万博招致表明」から2005年の開催に至るまでの主な出来事を振り返る。

地球市民村の活動をふりかえるゲストトーク

■地球市民村に参加して / NPO birth 代表 折原磨寸男

NPO/NGOの基本的な役割は「愛知万博のテーマの体現」だと考えている。持続可能な社会の実現に向けて、

「楽習」をコンセプトに参加体験型プログラムを提供してきた。出展の成果として、「社会問題への関心層」を増加できたことが挙げられる。来場者の熱心な反応からも手ごたえを感じている。おそらく参加した30団体は皆、手ごたえを感じていると思う。万博終了後のNPO/NGOの役割も考えていかないと、万博開催の意味が無いと思っている。今日は、「万博に参加したNPO/NGO」、「参加はしなかったが万博の土台を築いてきたNPO/NGO」達と共に未来を考えていきたい。

■ 海上の森の保全をめぐる

1、海上の森の会 運営委員（元ものみ山自然観察会代表）曾我部行子

海上の森環境調査時のスライドを紹介し、海上の森の価値を次の3点から訴えてきた。①古くから人の手が入った里山が、美しい景観を作っていること。②豊富な地下水が存在し、開発が海上の森周辺も含めて自然に多大なダメージを与えること。③海上の森の全域に貴重種が存在し、水源を断つことは貴重種の存在を脅かすこと。

94年のBIE来日時、及び96年にパリで開催されたBIE総会の際、直接BIEに働きかけるなどの活動などによって、国の開発基本構想に影響を与えた。1990年から始めた定例自然観察会を基本にした様々な活動によって2000年には、開発予定地を当初の1/10まで縮小させることができた。

2、日本野鳥の会 自然保護室長 古南幸弘

曾我部さんら地元の人たちの「森を残して欲しい」という声を応援する形で、「環境万博が価値の高い環境を破壊して成り立つという矛盾」、「世界博という場で、環境を壊す日本人像を、世界に向けて発信して良いのか」という問題意識より活動を開始。本当の「環境万博／市民参加」の実現を求めてきたのが、「私たちの万博」だった。閉ざされていた意思決定のプロセスは、環境影響評価やオオタカの巣発見などを経てもなかなか変らなかった。1999年8月には、WWFや日本自然保護協会らと共に「開発計画の見直し」「万博へ海上の森の里山の自然そのものを展示」「将来の里山保全に向けた国営公園化などを市民参加で検討」の3点を愛知県と博覧会協会に提案。国際的な団体からのBIEへの書簡などの後押しもあり、2000年4月に開発計画の中止が決断され、「愛知万博検討会議」で会場計画が見直されることとなった。5月～12月に開かれた愛知万博検討会議は、異なる意見の人々が円卓を囲み、会議の場や資料をメディアや市民に公開、立候補により委員長が投票で選ばれるというオープンな会議を行い、同時にごく短い期間で会場計画の変更などを「検討会議提案」として合意した。今までの万博は開催後に都市開発を残してきたそうだが、愛知万博は里山自然を残すことになった。2004年には将来に渡って海上の森の保全・活用を担おうという市民による「海上の森の会」が結成された。

■ 愛知万博計画過程からふりかえって / 東京大学大学院情報学環教授 吉見俊哉

大阪万博やつくば万博の時代から、万博会場の外では市民団体が活動をしてきたが、万博会場内での本格的な市民参加は今回の愛知万博が初めて。今回の万博においては重要な要素が3つあった。1つは、会場候補地に選ばれたことから、海上地区の自然の貴重さが発見されたこと。2つ目は、地域の小さいNPO/NGOがグローバルなNPO/NGO団体と繋がり、国を動かしてきたこと。そして3つ目としては、「Beyond development」という言葉が政府から出てきたこと。これまで「万博＝開発」としてきた政府自体が、その方針を変更せざるをえなかった。それは、海上の森というトピスが、「本当の環境博とは？」という問題を突きつけてきたからだと考えられる。その後、長久手にメイン会場を移したことで結果的に「環境博実現」へのハードルは下がったが、果たしてそれが本当に良かったのか？海上の森で「いかにして本当の環境博を実現するか？」を、最後まで徹底的に考えつくす機会を逸したという捉え方もある。

■ 里／森の自然学校を運営して / 日本環境教育フォーラム専務理事 川嶋直

万博協会より「自然学校」業務を受注したことが発端で万博に関わった。つまりNGO団体でありながら市民参加とは違う立場での参加と言える。協会の内側に入ったことで、国や政府に対して「Non＝反対」を掲げるだけがNPO/NGOの存在意義ではなく、代替提示をし、成果を残すことに挑戦した。政府や国の内側に入ってNPO/NGOができる事も多く、その関係性に21世紀的な新しさを感じた。

★第二部：15:40～17:30

ゲスト・来場者交えてのディスカッション

(コーディネーター：地球市民村 事務局兼NPOチームマネージャー 中野民夫)

NPO/NGO が NO,NO というだけの時代は終わったのではないか？という川嶋氏の発言を皮切りに、ディスカッションが始まった。

古南氏：「万博開催自体に NO を言っていたわけではなく、環境万博と言うならばしっかりした万博をやるべきと言って交渉して来た。交渉の結果、海上の森は守られ、学びと交流の森として県と一緒に創り上げていく段階に入った。強面の交渉の後に、誰が中心になって担うのが心配だったが、瀬戸の底力で、保全活用の担い手として海上の森の会が地元中心のメンバーで動き始めた。こんどは創っていく活動を応援していく番と思っている」

折原氏：「地球市民村への出展を迷ったが、万博の内にいたほうがいい、と Yes の選択をした。」

曾我部氏「活動を通して No を言う「言い方」を学んだ。1993 年に初めて県に公開質問状を出したが、相手にされなかった。しかし 1994 年の 2 回目の質問状には文書での回答があった。その後の活動も含めて学んだことは、No を言うには、客観的な根拠や具体的な数字が必要だということ。No の声を県が聞いてくれることで、言う側の責任が生じることにも気づいた。しかし残念だったのは、やり取りの初期段階では聞く耳を持ってくれなかったことである。」

次に、万博歴史上初めて NPO/NGO が万博の中に入ったことについての議論が交わされた。

万博検討会議の議長だった谷岡氏：「会場の中に入ったことで、NPO/NGO 活動が正当化され、地位が向上したと言う見方もあるが、反面動物園の檻の中に入れられ牙を抜かれたのではないか？」また、自らの市民参加からの撤退の理由として「万博における市民参加が 2 つの会場に分断されることに対して反対してきたが変わらなかった。また市民参加への入場料について、無料もしくは別料金を設定して安く抑える案を訴えてきたが聞き入れられなかった。そのままの状況で関わっていると、市民の分断統治・ランク付けを認めることになってしまうことを恐れ、撤退を決めた。」

元 JVC、現在地球市民村事務局の柴田氏：「これまで対面の関係であった NPO/NGO と国・企業が今回万博で初めて横に並んだ。これを次ステップにしたい。」「来場者の反応で、NPO/NGO 自身の新たな気づきがあった。これまであった NPO/NGO 側の一般の人に対する不信感が、今回で拭われたように思う。」

川嶋氏：「万博への NPO/NGO の参加は、実験であった。関わった全ての人に学びがあったのではないか。元来私たち NPO/NGO にはエリート意識（自分では分かっているという意識）があるが、一般の人も社会問題への意識を持っている。意識は「ある・無い」の 2 極に分かれているのではない、大切なのは触発の仕方だ。」

4 月の出展団体エコプラスの大前氏：「別業種の NPO/NGO が集ったことは、地球市民村の財産である。ポスト万博プロジェクトとして、出展団体同士のつながり、さらに出展しなかった団体とのつながりの場ができて欲しい。今はまだ両者に不信感があると感じられるが、今後はそれを乗り越えたい。」

市民プロジェクト(瀬戸会場)、「漂流日記」の深津さん(大学生)：「出展の過程で、第 3 者の意見がなかった。自分とディレクターとの関係だけでは不安だった。」と発言。それを受けて、谷岡氏が「本来、今回の市民参加には、市民同士の「教え合い・学び合い」が必要だった。自分達で決め、学び、高めあう連携が必要だったのに、その体制を作れなかったことに敗北を感じる。この万博での学びを次の世代の人々が役立てて欲しい。」

折原氏：「博報堂の事務局が行った、出展方法を考える事前のワークショップで NPO/NGO の成長があった。」

その過程で NPO/NGO 同士で批評し合えたこともよかった。またそこで生まれた横の連携が本番に役に立った。同じ月の出展者だけではなく、前月以前の出展者からのアドバイスで自分達のパビリオン運営が助かっている。」

その他、万博のメイン会場が瀬戸から長久手に移ったことについて触れられた。

第 1 部で吉見氏が投げかけた、「長久手にメイン会場を移したことで「環境博実現」へのハードルは下がったが、果たしてそれが本当に良かったのか？」という問いを受けての議論が交わされた。

エコマネーの谷口氏：「海上の森から長久手に会場を移したのは問題の棚上げだったのではないかと思う。」と述べた。また「自分はランドスケープデザインをやっているが、開発は「公園をよくしたい」という人々とやっていくことが重要だ。」「ともあれ、色々な立場で万博と関わる機会を提供したので、万博をやった意味はあったと思う。」

吉見氏：「『海上の森の万博』だったのが長久手に移り、イメージの上で海上の森が切られたと感じる。海上の森がお荷物になったような印象を受ける。市民と万博の回路をもう一度見直すことが必要である。」また「意思決定のプロセスの中核が見えない。どこで、誰が、何を決定しているのか？が公開される必要がある。大阪万博では、財界と国との食い違いも公開され、出版もされた。」さらに「万博後の『市民・NPO/NGO サミット』という提案は良いと思う。そういった場が設定されることで、議論の水準が上がっていく。愛知万博の財産を次の段階へつなげて欲しい。」

愛知万博のプロセスで異なる立場の人々の交流があり、それに伴う新しい発見があった、という感想が出る。

曾我部氏「谷岡氏や、愛知県館を設計した柳沢氏らとの出会いは、看板で人を判断することは違う、ということを知ってくれた。今後、違う信頼関係を築いていかなければならないと思う。」

古南氏：「柳沢氏や山根一真氏らが、海上の森の自然を壊さぬようにと払った細かい配慮に驚いた。受注した仕事をするという任務以上の想いを感じた。ボランティア精神は NPO/NGO のものだけではないことを知った。」また、最後に繋がりの重要性を述べた。「NPO/NGO の本領として横につないでいく力は大事である。その意味で、万博において「地球市民村」「森・里の自然学校」「瀬戸愛知県館」がもっと繋がれたら良かったと感じていたが、今日のシンポジウムでその思いが少し実現した。縦につないでいくことも重要で、次世代に繋げる為に記録を残すことが必要である。愛知万博検討会議や国営公園の市民提案の資料が、柳沢氏や山根氏の仕事につながっていき、瀬戸愛知県館で海上の森が展示されることになった。『市民参加型社会とは』（有斐閣）の本もそのひとつになっていくだろう。愛知万博の体験を、自分たちも多くの人々に分かりやすい形で伝えていきたい。」

以上